私的所有地のレクリエーション利用をめぐる作法

——アイルランドにおける農村アクセス問題への対処から——

北島 義和*

農村アクセス問題とは、レクリエーション活動のため農村地域の土地を利用する人々と、その土地の法的所有者（おもに農民）の間の対立である。この問題をめぐって生じる、アクセスの地点ごとに対話やシステムが成立したりしなかったりする一方、問題における不正義を明白に指摘することも難しいという事態は、複数の主体による自然資源管理をめぐる先行研究の枠内には必ずしも収まりきらない。本稿は、農村アクセス問題の深刻化したアイルランドにおける山歩きを事例として、そのような状況下でのレクリエーション利用者の対処のありようを、その活動の多地点性を踏まえたかたちで分析する。

現在アイルランドの2つのウォーカーの全国団体は、それぞれ正義と対話の観点から農村アクセス問題を捉え、互いに対立している。他方で、実際にアクセスに問題を抱えた現場で活動する登山クラブへの調査からは、彼らが「農民との良好な関係」という論理を用いつつ、あるべき姿の山歩きという理想を重視する観点からアクセスに対処していることが判明した。そのような実践は、農民とできるだけ共存しつつこれまでどおりのレクリエーションをおこなっていくための作法として現場で機能しており、レクリエーションの論理それ自体に他者との共存を可能にするような志向性が内在していることを示している。また、この結論は人々の日常的実践がもつ深みに注視することの重要性を我々に教えている。

キーワード：自然資源管理、レクリエーション、農村アクセス問題

1 問題の設定

近代以降の先進国社会では、余暇のため都市住民を中心とした公衆が農村地域を訪れる機会が増加していった（Corbin 1995=2000）。だが、この変化は農村地域におけるさまざまな資源のコントロールをめぐる、多様な利害関係者の間でしばしば対立を引き起こしてきた。その1つが、レクリエーション活動のため農村地域の土地（おもに農地）を利用する人々と、その土地の法的な所有者（おもに農民）と

* 京都大学文学部非常勤講師 kitajima@socio.kyoto-u.ac.jp

の間の対立，すなわち「農村アクセス問題¹⁾」である．このような対立は，現代でもとくに私的所有制²⁾を基盤とした西洋社会においてしばしば見られる（Jenkins and Prin 1998）．私的所有制のもとでは，土地を法的に所有する権利者がそこへの侵入者を何らかの手段で排除することは基本的に合法である．そのため，前記の対立が先鋭化した場合には，それまで公衆がアクセスしてきた土地がその所有者によってブロックされるという事態も少なからず生じる．この農村アクセスをめぐる対立は，西洋諸国ではしばしば個別状況を超えて社会問題として議論されてきた．つまり農村アクセス問題とは，農村地域において私的所有権が設定されている自然資源，とくに農民の所有する農地³⁾の，オープンアクセス的⁴⁾なレクリエーション利用が，多地点的⁵⁾に発生するという社会状況を背景とする問題である．

この農村アクセス問題のように，ある自然資源をめぐる複数の主体が競合する場合には，しばしば討議や協働を通じた問題解決が試みられる．そのような自然資源をめぐる関係者間の対面的相互行為やネットワーク形成といった対話に関しては，行政やNGOなどの地元外アクターも組み入れた「協治」を論じる現代的なコモンズ論（井上 2008）や，多様な主体による環境のガバナンス過程を分析する「環境ガバナンスの社会学」（脇田 2009）の観点から，多くの研究がなされてきた⁶⁾．それらの研究では，個別の権利者との折衝（関 2009）から，地域レベルでの関係者の協働（三上 2009），そして広くはグローバルな資源管理の議論（大曲 2002）に至るまで，さまざまなレベルの対話の場に注目して分析がなされている．また，それら複数のレベルを接続する「重層的ガバナンス」のありようについて考察を深める必要も提起されている（植田 2008）．

しかし，前記のように農村アクセス問題の背景には不特定多数の人々が多地点的にレクリエーション利用をおこなうという社会状況があり，そこでは対話の場に関与してこない利用者が多数であったり，あるいは対話自体がなされないままであったりする地点もしばしば発生する．他方で，そのような対話による対処ではカバーできない状況でも，資源利用をコントロールする何らかのシステムを作ることを通して問題解決が図られることがある．そして，そのようなシステムについてもコモンズ論や環境ガバナンス論の見地からの研究があり，そこでは利用者が共有できる「シナリオ」の創造や（近藤 1999），地元利益をもたらすインフラの設置（廣川 2013），あるいは利用状況をモニタリングする仕組みの構築（新川 2012）といった，さまざまなシステムのありようが記述されている．しかし，このようなシステムを構築したり有効に機能させたりするにはしばしば人的・財政的な資源が必要であり，それらの資源を十分に調達できない場合はシステムによる対処が達成できないこともある．すなわち，農村アクセス問題をめぐっては，アクセスの地点ごとに対話の場やシステムが作られたり作られなかったり，あるいはそれらが有効に機能したりしなかったりという斑がしばしば生じるのである．

他方で，前述のように私的所有制のもとでは，土地所有者は自らの土地に対して排他的な支配権を有している．つまり，農村アクセスをめぐる農民とレクリエー

ション利用者の間には法的権力の非対称性が存在しており、対話の場やシステムの有無にかかわらず、農民は一方的にアクセスをブロックすることが法的に可能である。このような環境をめぐる権力の非対称性に関しては、環境正義の視点からの先行研究がある。池田寛二は環境正義をめぐる議論を、「コミュニティの環境正義とグローバルな環境正義をつなぐ公共性の環境正義」「功利主義的環境正義」「分配正義としての環境正義」「受動的環境不正義の是正としての環境正義」の4種類に区分しているが（池田 2005）、このうち後者2つがとくに権力の非対称性に関わるものである⁷⁾。池田は後者2つの例として受益圏-受苦圏論（船橋 2001）や加害-被害構造論（飯島 2001）を挙げており、これらは公権力あるいは法や規則による一方的な生活の破壊という不正義を糾す議論と言える。とくに自然資源のレクリエーション利用をめぐっては、入浜権運動の考察（関 1999）などが同様の視点に立つものであろう。しかし、入浜権などの環境権議論の多くは「人間がその地域に『住もう』こと」を重視して構成されている一方（関 2001）、たとえば北欧で設定されている公衆の自然アクセス権などは地域生活と必ずしも不離のものではない⁸⁾。これに加えて、現代農村でレクリエーションをおこなう人々は富裕層が主流であるとの分析もある（Curry 1994）。つまり、農村アクセス問題においては何が不正義かは必ずしも明白でなく、そのため私的所有権の法的制限などの対処は社会的合意を得られないことも少なくない。

前記のように、農村アクセス問題をめぐってしばしば生じてくる事態、すなわちアクセスがなされる地点ごとに対話やシステムが成立したりしなかったりする一方で、問題における不正義を明白に指摘することも難しいという事態は、複数の主体による自然資源管理に関するこれまでの研究の枠内には必ずしも収まりきらない。では、そのような状況下において、現場のレクリエーション利用者はどのように対処をしているのだろうか。これまで自然資源のレクリエーション利用については、しばしば1つの場所や地域に注目した分析がなされ、レクリエーション利用者の実践はその地域の生活にいかに寄り添っているかという基準のもとで考察されてきた（村田 2010；家中 2007）。本稿はそのようなアプローチ自体に異を唱えるものではけっしてないが、レクリエーションを無前提に肯定する見解と距離を取って個別の生活の場を重視するという力点ゆえ、それらの研究では多地点的にレクリエーションをおこなう人々の実践が十分に分析されないままになってしまっている。他方で、農村アクセス問題と関連させてこのようなレクリエーション利用者の実践に注意を向けた数少ない業績として、イングランド・ウェールズのカヌー愛好家についての N. Ravenscroft らの研究がある（Church et al. 2007；Gilchrist and Ravenscroft 2008）。しかし、彼らの研究はエスノグラフィックな調査に基づくものではなく、現場でのレクリエーション利用者の対処のありようについて十分な分析をおこなえていない。

そこで本稿では、公衆の山歩きをめぐって農村アクセス問題が深刻化しているアイランド⁹⁾を事例として、山歩き愛好家（以下ウォーカー）たちがどのようにこ

の問題を捉え、対処しているのかについて考察する。次節以降では、まずアイルランドの山歩きと農村アクセス問題の歴史、そしてウォーカーを代表する2つの全国団体の主張について述べる。その後、アクセスに問題を抱える地域を中心に山歩きをおこなっている1つの登山クラブの活動に焦点を当て、全国団体の主張とこのクラブの実践を比較しつつ、現場でクラブが用いている対処論理を分析し、それが有している可能性について考察をおこないたい。

2 アイルランドにおける山歩きと農村アクセス問題の進展

アイルランドにおいてレクリエーション目的の山歩きがいつ発祥したかは、必ずしも明らかではない。だが、イギリス植民地時代の1895年に、ブリテン諸島の山歩きのガイドブックシリーズの1冊としてアイルランドが初めて取り上げられ、独立後の1939年には観光局によって全国の主要な山を紹介したガイドブックも出版された。しかし、アイルランドの人々にとって長い間山歩きはポピュラーなレクリエーションではなかった。ウォーカーの全国団体 Federation of Mountaineering Clubs in Ireland が結成されたのは71年のことであり、当時でも加盟していた山歩きのクラブは8つのみであった。これらの時代、ウォーカーたちはアクセスをめぐる問題をほとんど意識することなく、山にアプローチするため低地の農地を横切り、高地の放牧農地にたどりつくところを自由に歩き回っていた。

だがその後、次第に山歩きはアイルランドで人気を得ていく。1970年代後半からガイドブックの出版が徐々に増え、80年代からは山歩きのクラブの数も増加した。さらに、94年から約12年にわたる空前の好景気によって人々の所得や車の所有率が急速に伸び、農村へ赴いて山歩きをおこなう人々が急増した。先述の全国団体（後に Mountaineering Ireland [MI] と改称）に加盟するクラブの数も、96年には73、2010年には145となった。だが、ウォーカーの増加に伴って、1980年代後半頃から土地所有者である農民との対立的状況が顕在化していった。現在までアイルランドにおいては、ウォーカーのための包括的な法的アクセス権は存在していない。そのため、それまで可能だったアクセスが農民によってブロックされる事態が増加していき、90年代後半には農村アクセス問題はアイルランドにおいて社会問題として捉えられるようになった。

アイルランドにおけるこのような対立の背景には、たとえば北欧諸国のように「公衆の伝統的権利」としてアクセスを捉える基盤が薄いことがある。前述のように、アイルランドの山歩きはここ30年ほどで急速に隆盛した。だが、それ以前には少数の人々が従事していたのみであり、広く公衆にアクセスの権利が存在するかどうかについては社会的な合意がない。くわえて、植民地時代の地主による搾取という歴史的理由などから、アイルランドでは農民の私的土地所有権が重視される傾向も存在している (Crowley 2006)。

他方、アイルランド政府は2004年に全国的な利害関係団体を集めた委員会

Comhairle na Tuaithe (CNT) を設置し、関係者の対話を通じた問題解決を模索してきた。しかし、CNT は現在まで有効な解決策を見いだせておらず、また政府自身も財政的な理由などから、ウォーカーと農民の対立を調停できるようなインセンティブスキームやインフラといったシステムを包括的に整備することができていないままである。

3 ウォーカーを代表する2つの全国団体の観点

CNT には、農村でレクリエーションをおこなうさまざまな全国団体が参加している。だが、現在まで農村アクセスに関して活発な議論がおこなわれてきたのは山歩きなどのウォーキング活動をめぐってであり、CNT においてウォーカーは2つの異なる全国団体によって代表されている。

1 つは、Keep Ireland Open (KIO) という 1994 年に結成された団体である。彼らはレクリエーション関連団体や環境団体および個人メンバーから構成されており、数十年前まで可能だった農村における伝統的なアクセスが急速に失われてきているとして、レクリエーション利用者のためのアクセスの保護を求める活動をおこなっている。とくに KIO は、①人家から離れた高地の放牧地に、公衆の法的な歩き回る権利を設定すること、②それ以外の低地には、法的な公衆の通行権を設定すること（これは散策に利用される道のほか、①の場所へたどりつくための道なども含む）を要求している。また彼らは、大きな被害もないのにアクセスをブロックする土地所有者や、公衆への法的アクセス権付与に反対する農民団体に対しては、公衆の楽しみや観光産業に害を与えていると非難をおこなう。つまり KIO は、おもに正義の観点から農村アクセス問題を捉えていると言える。だが、前述のように公衆のアクセス権について社会合意のないアイルランドでは、彼らのアプローチは広い支持を得るに至っていない。

もう 1 つの団体は、前節で述べた 1971 年設立の Mountaineering Ireland である。MI のおもな要求は、①公道や駐車場から高地や沿岸地に至るための、土地所有者の許可かリースか公衆通行権によるアクセスルートのネットワーク、②放牧のほかには最低限の農業活動しかおこなわれていない高地や沿岸地における、法的なアクセスのフレームワークである。土地条件を踏まえつつ直線的なものと歩き回るものという 2 種類のアクセスの保護を目指すという点において、MI の主張は KIO のそれに類似している。しかし MI は公衆アクセス権の早急な法制化は求めず、まずは農民団体などとのパートナーシップを通じて問題に対処するという方針をとっている。MI は、現在ウォーカーは法的なアクセス権をもっておらず、土地所有者の好意と寛容さによってアクセスが可能になっていることを強調し、長年使用している場所でもアクセスを当然視せず、機会があれば土地所有者と話をしてアクセスが可能か確認すべきであるとする。彼らはまた、地域レベルで利害関係者の対話の場が設けられている場合には、それに積極的に参加するようメンバーに呼び掛けても

いる。よってMIは、おもに対話の観点から農村アクセス問題を捉えていると言える。しかし、1節で述べたように不特定多数の人々が多地点的にレクリエーション利用をおこなうという状況下では、そのアクセス全体を対話でカバーすることは難しく、CNTのように対話アプローチはしばしば行き詰っている。

このように、全国団体レベルではウォーカーの農村アクセス問題を捉える観点はおもに正義と対話の2つに分かれており、それぞれを標榜するKIOとMIは、ともにウォーカーの代表という立場ながら現在お互いのアプローチを厳しく批判しあっている。だが、前述のように両者のアプローチはともに限界も抱えている。では、これらの主張と比べて、実際に問題を抱えた現場のウォーカーはどのような対処をおこなっているのだろうか。

4 農村アクセス問題の現場と地元クラブによる対処

アイルランドには農村アクセス問題の統計などではなく、実際に対立が起きている場所を特定していくのは容易ではない。ただ、より経済的に貧しく、景勝地の多い西側地域で起きることが多いと一般に言われている。この東西分布を考慮したうえで、本稿ではアイルランド北西部のある丘陵地帯を中心事例として取り上げる。この丘陵地帯は2つの県にまたがる広大なもので、そのほとんどは近隣の諸集落の農民が所有するいくつもの私有地および共有地¹⁰⁾からなり、おもに羊の放牧地として利用されている。他方、この丘陵地帯は周辺あるいは遠方から訪れる個人またはクラブなどの団体によって山歩きの場としても使われてきており、先述の1939年出版のガイドブックもこの丘陵地帯のいくつかの山々を紹介している。ただ、この丘陵地帯の周辺地域でも近年まで山歩きはポピュラーではなかった。この地域で初めて登山クラブが設立されたのは72年、周辺で最大の都市Aにおいてであったが、それでも80年代後半までは山歩きをする人は少数にとどまっていた。だが、90年代から状況は変わり始め、この20年で山歩きは人気の余暇活動となった。このことは、91年に22人だったこのクラブのメンバー数が、2009年には88人に増加していることからもうかがえる。

ウォーカーがこの丘陵地帯へアクセスするためのルートは約25カ所あり、多くはその近隣の人々によって共有されている農道か、私有地上を通る私道か、私有の農地上の道なき道である。このルートで丘陵の高地部分まで達すると、ウォーカーは自由にそこを歩き回り、別のアクセスルートか行きと同じルートで下山する。だが、この丘陵地帯はアイルランドの中でも深刻なアクセス問題を経験してきた場所でもある。そのきっかけは1993年にこの丘陵地帯の山歩きのガイドブックが出版されたことであった。その本に自らの土地が許可なく掲載されていることに気づいた農民の1人が、抗議のためその土地へのアクセスをブロックした。その後この農民は、2000年と04年に無断で彼の土地に入ったウォーカーに対し暴力事件も起こし、それらの事件はメディアによってスキャンダラスに報じられた。この出来事を

皮切りに、折からのウォーカーの増加も相まって、その後この丘陵地帯では他の何人かの農民もアクセスのブロックに乗り出している。

本稿では、A に本拠をおく前述の登山クラブ（以下とくに記述がないかぎり「クラブ」とのみ表記）を取り上げ、彼らの実践を検討する。クラブは7月と8月を除く毎週日曜に、この丘陵地帯での山歩きを中心としたウォーキング活動をおこなっている。2009年11月から10年10月の1年の間には31回のウォークがこの丘陵地帯でなされ、この間の平均参加人数は21.5人（最大53人、最少5人）であった。どこでどのようなウォークをおこなうかは、クラブ内のカレンダー委員会によって毎年1回メンバーの希望を集計して決定される。メンバーのほとんどはAの住民であるが、隣県や少数であるが首都ダブリンに住居をもつ者もいる。また、クラブは1979年以来、MIに加盟している。本稿で依拠するデータ¹¹⁾は、このクラブの活動への参与観察とクラブ内外でアクセスに関する何らかの事象に携わったことがあるクラブメンバー7人へのインタビュー¹²⁾であり、以下ではそこに繰り返しあらわれてくる行動や語りの様式を取り上げる。

まず、インタビューをおこなったメンバーらは、アクセスに関してKIOやMIと同様2つに分けて捉えている。すなわち、低地から高地へのアクセスルートと、高地で歩き回ることという2種類である。そして彼らは、前者は農民の許可によるものだが、後者については権利を有していると考えている。その根拠として彼らが上げるのは、高地は家屋や集約農地などから離れており、農民の財産に被害を与える可能性がないこと、高地は共有地であることが多く、その場合各農民は何分の1かの所有権しかもっていないので自分たちをブロックできないであろうことなどである。

そして、基本的にはこの区分に沿ってアクセスへの対処もなされている。クラブにおいて対処の中心を担っているのはMさん¹³⁾である。彼は早期退職するまでの37年半の間、Aにあるハードウェアショップで働いていた。この店には、丘陵地帯近隣の多くの集落の農民が農業関連資材を購入に来ており、そこでの仕事をとおしてMさんは彼らと顔見知りになっていった。そのため、彼はアクセスルートを所有する農民の多くと連絡関係をもっており、そのルートの使用に際して何らかの問題要素がある場合、事前に農民にクラブの活動を伝えたり、あるいは農民からの情報をクラブの活動に反映させたりする。たとえば2010年2月に予定されていたある山歩きは、その直前に場所を変更するとの通達がメンバー全員になされたが、これはその場所のアクセスルートを所有する農民たちがウォーカーのアクセスをめぐって内輪もめしているようなので避けたほうがよいというMさんの助言によるものであった。メンバーたちは、問題はアクセスルートのみであり、山歩きのためにはそこを所有する農民の許可があればよいと考えている。そのためMさんは、この地域で農村アクセス問題が激化した2000年代半ば頃には、それらの農民たちに口頭で許可を確認したという。ただ、アクセスルートが多数の農民の共有である場合には、誰に連絡して良いかわからないため許可を確認することはほとんどない

と M さんは語る。

このようにクラブは、高地については「歩く権利がある」とする一方で、アクセスルートに関しては農民と対話関係を構築する志向をもっている¹⁴⁾。ただ、彼らはこの丘陵地帯のアクセスルートを所有する農民全員を把握しているわけではない。たとえば 2009 年度のクラブの総会において、農民たちに日ごろの感謝をこめてクリスマスプレゼントを贈ってはどうかとの提案がメンバーの 1 人からなされたが、これは「良い考えだが、誰かに送り忘れると問題になってしまうかもしれない」との理由で却下されている。

5 閉じられたアクセスと開かれたアクセス

だが、このような農民との間の対話関係は、時に「閉じられたアクセス」を生むこともある。たとえば、2004 年頃それまでクラブが使っていたアクセスルートの 1 つに「私有地」との看板が建てられ、以来クラブはこのルートを使うのを避けている。しかし、その場所にはもう 1 つ古い農道があり、あるクラブメンバーの弟がその土地を所有している。そのため、クラブがこの場所に行く際は L さん¹⁵⁾がこのメンバーを通じてその道の通行許可をもらっている。だが、この農民は誰もがそこを行き来する事態は望んでいないため、L さんはウォークの前に、これは 1 日だけのアレンジメントであることを参加メンバーに告げ、後で彼らが自分たちだけでそこに来ないようにしている。このようなアクセスは、個人や地域外からやってくる団体など、クラブ外にいる人々にはきわめて得にくいものであり、そこでは排他的な関係が生みだされている。

そして、このような事態は公衆に開かれたアクセスを達成しようとする MI や KIO の立場とは相容れない。たとえば MI の Access and Conservation Officer は、「MI が現場に出て行ってアクセス問題を解決するリソースはない、我々は地元のクラブが解決するのを手助けするだけだ。我々はどうすべきかについての現場の力と知識を信用している」として、地元クラブによる農民との対話が公衆に開かれたアクセスへとつながることを期待する¹⁶⁾。そのため、前記のような閉じられたアクセスについては、「我々は地元クラブにそういう議論をしてほしくない、自分たちのクラブだけでなく、より広い組織のエージェンシーとして動いてほしい」と批判的に語る。また KIO は、ニューズレターの 2007 年秋号において、「ダブリンの外側にあるウォーキングクラブの多くは屈辱的な現状に屈服し、地元クラブだけに地元の丘陵を歩くことを許すような土地所有者の『好意』を受け入れている」と述べ、「このようなおこないは、自分勝手に、近視眼的で、アクセス問題の大きさを覆い隠してしまう」として、MI より強い調子でこのような閉じられたアクセスを非難する。

しかし、A のクラブは自分たちだけ山歩きができればよいと考えているわけではない。実際、折に触れてクラブやそのメンバーは、農民との対話を通じて公衆の

アクセスの確保ために尽力もしている。たとえば、2010年に生じたアクセスルートブロックに関して、Cさん¹⁷⁾は県の建築課にいたころの道路工事の仕事を通じて、その土地を所有する農民を個人的に知っていた。そのため彼は「自分に何かできることがあるかもしれない」と思い、この農民の所にもう1度アクセスを公衆にオープンにできないかと話に行った。また、この丘陵地帯での農村アクセス問題の深刻化を受け、2003年から数年間にわたって、数名の有志の農民、2つの県の社会振興局、観光関係者などが集まり、問題解決のため話し合う会合が散発的に開かれた。その折にMさんは、クラブそしてウォーカー全体の代表としてそこに参加し、農民に対してウォーカーが無害であることを訴えた。これらの試みは、人的・財政的資源不足によるシステム構築の困難という問題によって、いずれも不首尾に終わったものの、クラブやそのメンバーが、MIが望むような公衆全体のための対話もおこなっていることを示している。

だが他方で、農民と対話関係をもたない他の多くのウォーカーと同じ立場にクラブ自身がおかれる場合も少なくない。たとえば、クラブは創立時から現在まで、この丘陵地帯以外の他地域の丘陵にも年に幾度も山歩きに出かけている。しかし、その場合に彼らがその地域のアクセスルートを所有する農民と顔見知りであることはほとんどない。たんに彼らは、その場所を定期的に訪れることを通じて、そこにアクセス問題が存在しないことを知っているだけである。あるいは、クラブが地域外の新しい場所を歩く際には、以前にそこを歩いたことのあるメンバーからの助言や、山歩きのガイドブックの記述、あるいはMIがときおり会報に掲載するアクセス問題についての情報などが参考にされる。これらの場合、彼らは現地の農民と対話する契機をほぼもたずアクセスをおこなうだけである。

6 あるべき姿としての「農民との良好な関係」

前記のようなクラブやそのメンバーの行動は、MIのような立場からすれば中途半端な対話志向と映るかもしれない。彼らは地元丘陵地帯のアクセスルートについてはある程度農民との対話をおこなっているが、それは完全ではないし、高地については「歩く権利がある」と捉えてその必要性を感じていない。また、クラブの作る対話関係はときに排他性の高いアクセスを生み、公衆のアクセスとは齟齬をきたす事態を招く。しかし同時に、彼らは公衆の利用についても考えており、農民との対話から公衆アクセスを達成するための試みもおこなう。他方、この丘陵地帯外では彼らは農民との対話の契機をほとんどもたないままアクセスする。だが、これらの行動の間に矛盾はないかとメンバーに尋ねても、「自分たちだけ特別扱いだとは思わない」とか「問題の解決には国レベルの施策が必要だ」といったように、なかなか的確な答えが得られない。

他方で、インタビュー等においては、クラブメンバーから「農民との良好な関係」という表現がよく聞かれ、「我々は30年以上農民と良い関係を築いている」と

いった語りがなされる。そして、そのような「良好な関係」に反する存在として、彼らはKIOを「攻撃的すぎる」として批判的に捉える。彼らのそのような論理は、自分たちに歩く権利があると捉えている高地にまで適用される。たとえば、先述の暴力事件を起こした農民は当時アクセスルートと高地を私有していたが、クラブはその高地部分を歩くことも控えた。Lさんによれば、その頃KIOからコンタクトされ、この農民の土地でプロテストウォークをおこなわないかと提案されたが、クラブはそれを断ったという。これについて彼は、「摩擦を起こしたくはない。我々はクラブとしてそういうことはけっしてしてこなかったので、KIOの抗議運動に参加してクラブの名前を貶める理由はない。35年も農民と良好な関係をもってきたのだ」と語る。つまりKIOとは異なり、彼らは「歩く権利がある」と考えることと、その権利を正義の観点から主張していくことを必ずしも結びつけない。

メンバーたちがこのような言動をおこなうのは、結論を先取りして言えば、彼らがこの「農民との良好な関係」を山歩きの本来あるべき姿の重要な要素として捉えているためである。そのことを示す代表的な語りとして、Eさん¹⁸⁾と筆者の会話を以下で見てみよう。

Eさん「歓迎されるかぎりにおいてその場所に行く、それが大事なんだ。レクリエーション利用者として対立を避ける、それが基本原則だ」

筆者「どうしてKIOのようにアクセスの権利を主張しないのでしょうか」

Eさん「なぜかは説明できないよ。たぶん僕たちはそういう風に育ってきたのさ。……登山も、最初の頃は僕たちが歩いてきた場所で、たとえばX Challenge¹⁹⁾の予行をLargyだかEagle's Rockだかでやったとき、そこに僕がしばらく立っていると、年取った男がゲートのところにやってきて、僕が誰なのかとか何をやっているのかとか聞いてきた。それから彼は何時間もしゃべって、そこの地域について教えてくれた。いつもそういう歓迎があったんだ。そういう歓迎のある地域で育っているから、今起こっている対立は理解するのが難しいな」

ここでEさんは、「そういう風に育ってきた」あるいは「いつもそういう歓迎があった」といった言葉で、山歩きとは本来農民との対立を引き起こさず、彼らからも受け入れてもらえるはずの活動であるという思いを表明している。そして同時に、そのような山歩きには時に農民との友好的な出会いややり取りが付随しており、それがウォーカーの楽しみをいっそう増やしてくれると考えられているのである。Eさん以外のメンバーたちも、たとえば「昔は農民に会うとお茶をごちそうになることさえあった」とか「あの農民はいつも私たちが行くと庭先での駐車を許してくれる」といったかたちで、かつて存在した、あるいは現在も存在するそのような「農民との良好な関係」についてしばしば積極的に語る。もっとも、現在この丘陵地帯は複数のアクセス問題を抱え、クラブといえどもアクセスできない場所が少なから

ず存在しており、ウォーカーと農民の間には必ずしも友好的な雰囲気があるわけではない。だが、彼らはこの「農民との良好な関係」を山歩きのあるべき姿の一部として捉え、アクセスについての声高な主張よりそちらを達成することを重視しているのだ。このため彼らは、クラブが加盟している MI の、農村アクセス問題について農民とのパートナーシップを重視するアプローチを高く評価する。

しかし、この「農民との良好な関係」という論理は、先述の排他性の高いアクセスもそこに含むものである。たとえば F さん²⁰⁾は、KIO が地元クラブによる閉じられたアクセスを批判していることに関して、以下のように応答する。

「私たちはちょっと自分勝手かもしれない。でも、農民が私たちを土地に入れてくれていて、私たちはそれに感謝して歩き、楽しい日を過ごし、農民と良い関係をもつ、それを KIO を支持することで壊したくないわ。自分勝手な理由だとは思う、私たちの楽しみのためだもの」

つまりここでは、たとえ他の人々の利用が制限されていても、農民と対立せず楽しくすごせているという点で、山歩きのあるべき姿が満たされていると考えられている。だが他方で、農民との対話から公衆のアクセスを達成しようという試みも、この「農民との良好な関係」という同じ論理が満たされている行為なのである。くわえて、この「良好な関係」とは、農民との対話関係の構築を必ずしも伴うものではない。前述の E さんの語りが示すように、そこにはたまたま現地で出会った見知らぬ農民との友好的なやり取りや、あるいは農民と出会わなくとも対立なくアクセスができていうことも含まれている。そのため、「歩く権利がある」として基本的に農民との対話を志向しない高地や、対話の契機がほとんどない地元丘陵地帯以外へのアクセスなどにも、この論理が適用される。

すなわち、農民との接触を伴おうが伴うまいが、権利があると考えている場所であろうがなかろうが、閉じられたアクセスであろうが開かれたアクセスであろうが、いずれにせよ農民に対立なく受け入れられ、時に彼らとの友好的なやり取りも生むという、あるべき姿の山歩きであることがメンバーたちにとって重要なのだ。このため、前述のような一見首尾一貫しない諸行動が大きな違和感なく併存し、それが時に MI の方針と齟齬をきたすのである。他方でメンバーたちは、農民によるアクセスのブロックについてしばしば「悲しいこと」とそれを表現し、言わば「あるべきでない状態」と捉えている。そのため、彼らがブロックに直面した場合には、農民との関係を損なわないためにアクセスを控えるものの、時に一方的に山歩きの本来の姿を崩してしまうそのような農民の行為を批判的にぼやいたり、何とか抜け道を見つけてアクセスを試みようとしたりもする。クラブによるこの「農民との良好な関係」を重視する対処は、そのような葛藤もはらみつつ現場で実践されているのである。

7 結 論

以上のように、本稿で事例とした登山クラブのアクセスへの対処は、あるべき姿の山歩きと彼らが考えるもの、言いかえれば彼らの抱いている理想を重視する観点からおこなわれている。そして、そのような彼らの理想は、山歩きをめぐる自分たちの楽しみに準拠したものであり、それによって橋本和也が観光経験について述べているような「自分なりの『真正なものがたり』」が構成されている（橋本 2011）。その意味で、彼らの実践はある種の独りよがりのようなものかもしれない。しかしながら、その理想を構成する「農民との良好な関係」という論理によって、農民たちの見解もある程度汲みとるような空隙がそこには作られている。

このようなクラブの実践は、アクセスがなされる地点ごとに対話やシステムが成立したりしなかったりする一方で、問題における不正義を明白に指摘することも難しいという、農村アクセス問題をめぐる事態の中で、農民とできるだけ共存しつつレクリエーションをおこなっていくための作法として現場で機能している。つまり、ある地点では農民と対話し、時に彼らとの協働も試みるが、別の地点ではそれらをおこなわなかったり、その契機をもたなかったりして匿名の利用者になるといったように、地点ごとに自らの立ち位置や状況が変わっても、この「農民との良好な関係」という論理は、そこに左右されず、顔見知りの農民にも、たまたま出会う農民にも、そして出会うことのない農民にも一定の配慮をしつつ、できるだけこれまでどおりのアクセスをおこなうことを可能にしている。これは、法的なアクセス権によって農民の見解に従う必要をなくそうとする KIO のアプローチとも、農民の私的所有権に従ってできるかぎり対話をおこなっていくとする MI のアプローチとも異なり、私的所有権や対話の成立に拘泥しないが農民の見解を尊重する余地もあるという、ウォーカーの現場での活動に即した対処アプローチである。

もっとも、本稿はこのように述べることでレクリエーション全般を無条件に賛美しているわけではない。前述のメンバーたちの抱く山歩きについての理想は、現場での偶然の出会いにせよ何らかの対話の場を通じたものにせよ、農民と直接接触した経験の影響を受けつつ出来上がってきたものである²¹⁾。だが、丘陵地は一般に広大で、物見遊山などで一過的に山歩きをおこなう者が農民と接触することは稀であり、ある程度反復的かつ継続的に山歩きをおこなっている場合にしかそのような経験を十分もちえない。すなわち、「農民との良好な関係」を理想の山歩きの一部と捉えるには、ある程度までその山歩きが日常的実践となっている必要がある。くわえて、そのように活動が反復的かつ継続的なものだからこそ、「農民との良好な関係」を維持することが重要になってくるという側面もある。とくに、1つの地域をベースとしつつ毎週末の山歩きを毎年続けていく必要のある本稿のクラブの場合、その重要性はより大きなものとなる。ただし、前述のようにクラブの実践は、基本的に山歩きの経験から発露してくる楽しみに準拠したものである。この意味におい

て、KIO や MI のような「正義を達成せねばならない」とか「対話をおこなわねばならない」といったアクセスをめぐる原則論的な観点と、現場での山歩きの実験にもとづいたクラブメンバーらの語りや行動の様式は異なった位相にある。

つまり、本稿で描いたウォーカーたちの実践は、楽しみというレクリエーションの論理それ自体に、他者——それは実際に会える人だけでは必ずしもない——との共存を可能にするような志向性が内在していることを示している。そして、この志向性は前述のように反復的・継続的な日常的実践を基盤にしつつ、レクリエーション活動とともに多地点的に展開される。このようにして、複数の主体による自然資源管理という問題をめぐって、多地点的で日常的な実践がそれ自体で一定の対処能力を発揮しうる²²⁾という事実は、この問題に対して先行研究で用いられてきた対話やシステムや正義といった枠組みとは異なる、もう 1 つの分析視角の重要性を我々に教えている。それは、人々の日常的実践がもつ深みへの注視とでもいうべき視角であり、それによって、農村アクセス問題のように対話やシステムや正義が必ずしも成立しない現場を生きる人々を周縁化せず、そこで用いられている作法の豊かさにも目を向けることが可能となる。

ただ、実際の現場においても、KIO や MI と同様の姿勢をもつ利用者や、そもそもマナーの悪い利用者などが多かれ少なかれ存在することは否定できない。つまり、本稿で述べたような対処も、農村アクセス問題全体を解決するための魔法の杖とはなりえない。また、本稿のウォーカーたちもアクセスの現状について葛藤を抱えつつ実践をおこなっており、彼らはしばしば問題の解決のためより効果的な対話の場やシステムが構築されることを期待している。よって、本稿は農村アクセス問題の現状に対して何もする必要はないと主張するものではない。ただ、そのこととは別に本稿は、レクリエーション利用者の活動の多地点性を踏まえながら、その現場での経験から生みだされてくる他者に開かれた構えを描くことによって、彼らの実践が有している可能性の一端を示すものなのである。

[注]

- 1) 英語圏においてはこのような問題に対する統一的な呼称はなく、“access to the countryside” “countryside access” “access issues (problems)” などと表記されるが、本稿では「農村アクセス問題」という用語で統一する。なお、本稿において「農村アクセス」とは「農村地域の土地へのアクセス」をおもに指しており、狩猟採集なども含めたより広い概念としての「自然アクセス (access to nature)」の下位区分と捉えている。
- 2) 本稿において「私的所有」とは、所有についての法的な「私権」が設定されていることを意味しており、そこには私有と共有がともに含まれる。
- 3) 本稿において「農地」とは、第 1 次産業に供される土地を包括的に指しており、「放牧地」や「林地」なども含まれる。また、農村アクセス問題においては土地所有者が農業などに携わっていないケースもありうるが、本稿では土地所有者が農民であるケースに分析の範囲を限定する。
- 4) 通常「オープンアクセス」とは、所有権が明確でなく、誰もが利用できる状態を指す（秋道

- 2004)。しかし、農村アクセス問題においては、土地に私的所有権が設定されており、またアクセスのブロックも必ずしも非現実的ではないため、本稿では「オープンアクセス的」という表現を用いる。
- 5) 本稿において「地点」とは、ある1つの土地・場所・地域といった地理的ユニットを広く意味し、「多地点的」という言葉によって、人々がそのようなユニットを超えて、同種のレクリエーション活動（本稿では山歩き）をおこなうため、あちらこちらを訪れていることが含意されている。
 - 6) なお、「コモنز論」と「ガバナンス論」の異同については、三俣ほか（2006）を参照のこと。
 - 7) なお、1つめの「コミュニティの環境正義とグローバルな環境正義をつなぐ公共性の環境正義」は、本稿で述べる対話の議論とも一部関連している。
 - 8) 北欧の公衆アクセス権の背景にあるものについては、たとえば Hammitt et al. (1992) を参照のこと。ただ、この権利は近代における発明であるという見解も存在している。
 - 9) 本稿でのこの語は、イギリス領北アイルランドを除くアイルランド共和国を基本的に指すものとする。
 - 10) この共有地は「コモネージ」と呼ばれ、2人以上のシェアホルダーによって所有される放牧地である。シェアホルダーの間では集合行為はあまり見られず、管理組織なども存在しない。
 - 11) 本稿の事例地域でのデータ収集は、2009年9月～10年10月、13年12月におこなわれた。
 - 12) この7人はクラブの活動への参与観察に基づいて選択された。クラブは約90人のメンバーを有しており、各人の活動への参加の度合いはさまざまである。また、アクティブなメンバーでもアクセスに関する事象に携わったことのある人は決して多くない。
 - 13) 50代・男性・クラブの創設メンバーの1人。1980年代から2012年度までクラブの書記を務めた。
 - 14) 対話関係の構築にはクラブと農民との地理的な近接性が大きく作用していることは間違いはないが、それは必要条件というわけではない。たとえばある農家女性は、北アイルランドからこの丘陵地帯に定期的にやってくるウォーカーが、彼女の土地を通る時にはいつも家を訪ね、ワインを1本手渡してくれることを好意的に語っている。ただ、ウォーカーによるアクセスのほとんどは匿名的なものであり、1部の人々が作るこのような対話関係は、これまでのところ大きなダイナミズムを生みだしてはいない。農村アクセス問題におけるこのようなウォーカーの不特定多数性が生む困難、そして本稿の事例地域の農民の実践については、北島（2013）を参照のこと。
 - 15) 40代・男性・1990年クラブ加入。90年代から複数回クラブの会長を務め、2006年度から12年度の間も会長職にあった。
 - 16) 2010年4月27日インタビュー。
 - 17) 60代・男性・1977年クラブ加入。定年までA県の建築課に務め、その間にクラブの協力を得て県内のウォーキングトレイルの設置にも携わった。
 - 18) 40代・男性・1987年頃クラブ加入。2011年度に新設された環境オフィサーとして、年1回のクラブがよく使うアクセスルートの掃除をマネジメントする。Aに拠点を置くスカウト組織の指導者としても長い経歴がある。
 - 19) 1995年から2003年までこの丘陵地帯でクラブが主催していた山歩きのイベント。そのルート上で起こったアクセス問題のため、04年以降は開催されていない。
 - 20) 40代・女性・1990年クラブ加入。Eさんとともにクラブの環境オフィサーを担当。2012年

からはこの丘陵地帯で登山ガイドのビジネスを始める。

- 21) ただ、クラブの加盟する MI が農民とのパートナーシップを提唱しているなど、実際の経験の他に言説的な影響も皆無ではないだろう。また、今のところアクセスをめぐる事象に関わるメンバーは皆、この地域で農村アクセス問題が激化する以前から山歩きをおこなっているが、クラブでは問題の深刻化以降に山歩きを始めたメンバーも徐々に増えてきており、世代交代とともに彼らがアクセス関連のマネージメントに携わるようになれば、何らかの異なる傾向が生じてくる可能性もある。
- 22) この対処能力は、本稿の事例のように人々が「あるべき姿の楽しみ」を希求する過程などにおいて、副産物的に達成されるものであろう。しかし、そのようなある種の「コンヴィヴィアリティ」が「結果としての環境保全」につながることは、環境研究においてしばしば重視されてきた（関ほか 2009）。また、そのように自己準拠的な行為ゆえに、たとえば農民との対話の成立などが必須とはされず、結果的に従来形式を保って活動を続けていくことにつながっている。

【文献】

- 秋道智彌, 2004, 『コモンズの人類学』人文書院。
- Church, A., P. Gilchrist and N. Ravenscroft, 2007, "Negotiating Recreational Access under Asymmetrical Power Relations: The Case of Inland Waterways in England," *Society and Natural Resources*, 20: 213-27.
- Corbin, A., 1995, *L'Avènement des Loisirs 1850-1960*, Paris: Aubier. (=2000, 渡辺響子訳『レジャーの誕生』藤原書店。)
- Crowley, E., 2006, *Land Matters: Power Struggles in Rural Ireland*, Dublin: Lilliput.
- Curry, N., 1994, *Countryside Recreation, Access and Land Use Planning*, London: E. and F. N. Spon.
- 船橋晴俊, 2001, 「環境問題の社会学的研究」飯島伸子・鳥越皓之・長谷川公一・船橋晴俊編『講座環境社会学 1 環境社会学の視点』有斐閣, 29-62.
- Gilchrist, P. and N. Ravenscroft, 2008, "Power to the Paddlers?: The Internet, Governance and Discipline," *Leisure Studies*, 27(2): 129-48.
- Hammit, W. E., P. E. Kaltenborn, R. Emmelin and J. Teigland, 1992, "Common Access Tradition and Wilderness Management in Norway: A Paradox for Managers," *Environmental Management*, 16(2): 149-56.
- 橋本和也, 2011, 『観光経験の人類学——みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐる』世界思想社。
- 廣川祐司, 2013, 「現代社会に適合した新たなコモンズの探求——荒廃する里山の再生にむけて」間宮陽介・廣川祐司編『コモンズと公共空間——都市と農漁村の再生に向けて』昭和堂, 49-76.
- 飯島伸子, 2001, 「地球規模の環境問題と社会学的研究」飯島伸子編『講座環境社会学 5 アジアと世界——地域社会からの視点』有斐閣, 1-32.
- 池田寛二, 2005, 「環境社会学における正義論の基本問題——環境正義の四類型」『環境社会学研究』11: 5-21.
- 井上真, 2008, 「自然資源『協治』の設計指針——ローカルからグローバルへ」室田武編『グローバル時代のローカル・コモンズ』ミネルヴァ書房, 3-25.
- Jenkins, J. M. and E. Prin, 1998, "Rural Landholder Attitudes: The Case of Public Recreational

- Access,” R. Butler, M. Hall and J. Jenkins eds., *Tourism and Recreation in Rural Areas*, Chichester: John Wiley & Sons, 179-96.
- 北島義和, 2013, 「いかに農地は公衆に開かれうるか——アイルランドにおける農村アクセス問題をめぐって」『ソシオロジ』57(3): 3-19.
- 近藤隆二郎, 1999, 「コモンズとしての写し巡礼地」『環境社会学研究』5: 104-20.
- 三上直之, 2009, 『地域環境の再生と円卓会議——東京湾三番瀬を事例として』日本評論社.
- 三保学・嶋田大作・大野智彦, 2006, 「資源管理問題へのコモンズ論・ガバナンス論・社会関係資本論からの接近」『商大論集』57(3): 19-62.
- 村田周祐, 2010, 「エコスポーツによる観光開発の正当化とその論理——『生活の海』の重層的利用をめぐる漁民の対応」『ソシオロジ』55(1): 21-37.
- 新川達郎, 2012, 「環境ガバナンスの変化に関する実証的研究——『滋賀県琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例』2011年改正を事例として」『社会科学』42(1): 1-32.
- 大曲佳世, 2002, 「政治的資源としての鯨——ある資源利用の葛藤」秋道智彌・岸上伸啓編『紛争の海——水産資源管理の人類学』人文書院, 231-55.
- 関礼子, 1999, 「この海をなぜ守るか——織田が浜運動を支えた人びと」鬼頭秀一編『講座人間と環境 12 環境の豊かさをもとめて——理念と運動』昭和堂, 126-49.
- , 2001, 「環境権の思想と運動——〈抵抗する環境権〉から〈参加と自治の環境権〉へ」長谷川公一編『講座環境社会学 4 環境運動と政策のダイナミズム』有斐閣, 211-36.
- , 2009, 「半栽培の物語——野生と栽培の『あいだ』にある防風林」宮内泰介編『半栽培の環境社会学——これからの人と自然』昭和堂, 180-200.
- 関礼子・中澤秀雄・丸山康司・田中求, 2009, 『環境の社会学』有斐閣.
- 植田和弘, 2008, 「持続可能な発展の重層的環境ガバナンス」『社会学年報』37: 31-40.
- 脇田健一, 2009, 「『環境ガバナンスの社会学』の可能性——環境制御システム論と生活環境主義の狭間から考える」『環境社会学研究』15: 5-24.
- 家中茂, 2007, 「社会関係のなかの資源——慶良間海域サンゴ礁をめぐって」松井健編『資源人類学 6 自然の資源化』弘文堂, 83-119.

(原稿受付 2014.6.15 掲載決定 2015.10.24)

Methods of Recreation on Private Land:

Research on Approaches to Countryside Access for Irish Hill-Walkers

KITAJIMA, Yoshikazu

Kyoto University

kitajima@socio.kyoto-u.ac.jp

The countryside access issue is a conflict over countryside land between their legal owners (mainly farmers) and the people using them for recreational purposes. This issue often creates a situation in which a dialogue and system for recreational access may or may not work properly depending on the access point. Indisputable justice cannot be established for the conflict. However, existing studies on natural resource management by multiple stakeholders have not examined such a situation. This article explores the activities of hill-walkers at the multiple access points in the Republic of Ireland, where the countryside access issue has intensified recently, and analyzes how they consider access to the countryside in the aforementioned situation.

Ireland has two national organizations for hill-walkers. One approaches the countryside access issue from the justice perspective and the other from the dialogue perspective. Their approaches are not consistent with each other. An inquiry into the practices of a local mountaineering club based in an area where there have been serious access problems revealed that the club members approach the access to the countryside with their ideal of hill-walking, using the logic of building "good relationships with farmers." Unlike the approaches of the two national organizations, this club's approach has been effective as their methods help avoid conflicts with farmers and help them maintain their recreational activities. The result shows the potential of the logics of recreational activities. The logics create the methods to co-exist with other stakeholders in natural resource management. The result also reveals the importance of inquiry into people's everyday practices in researching natural resource management by multiple stakeholders.

Key words: natural resource management, rural recreation, access to the countryside

(Received Jun. 15, 2014 / Accepted Oct. 24, 2015)